
ディバイン・イヴ

新開涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディバイン・イヴ

【Nコード】

N2293D

【作者名】

新開涼

【あらすじ】

女剣士・月葉と牧師の娘・水穂のコンビが活躍する悪魔バトルシリーズ、第一話。江戸時代。徳川幕府のキリシタン弾圧の折、殉教した一人の少女の魂が現代に甦り……。最強の悪魔ハンター・月葉とごく普通の女子高生・水穂の出会いと初めての戦いを描く。

第一話 オンライン・イヴ

1622年（元和8年） 9月10日。

長崎市、西坂。

徳川秀忠の治世。豊臣秀吉のキリシタン弾圧の方針を受け継いだ幕府は、55名のカトリック教徒を処刑。

その中には成年男性だけではなく、女子どもも多数含まれていた。世に言う『元和の大殉教』事件である。

荒く削っただけの木の柱にくくりつけられた少女の足元に、役人は火を放った。

あらかじめ木の根元に油が注がれていたため、一瞬でその火力は爆発的に膨れ上がり、少女の腿の肉を舐め尽した。焦げた皮膚が割れ、白くなった肉が覗く。

「お月姉ちゃん！ わいら、ジュス様（イエスの意）信じて死んだら、天国にいけるんやなあ。そやな？」

隣りで今から同じ目に遭おうとしている弟が叫ぶのが、辛うじて聞こえた。

否が応でも、耐えられないほどの激痛を、まだ生きている神経が脳に伝えてくる。それでも、最後の力を振り絞って、お月は叫んだ。「そんなおりや。おまいら、見とれや！ ウチは絶対に戻ってきたるからなあ！ ジュス様が復活されたと同じように、大いなる力もろて・・・、悪を滅ぼすために、人を幸せにするために・・・」

お月は、それ以上は叫べなかった。
炎が頭部に及んだからだ。

現代（2007年10月）

気がついたら、深夜の三時になっていた。

モニターに集中しすぎていたせいで、目がショボショボする。この時間だから、眠気もそれに拍車をかけていた。和彦は、キリをつけるために、慣れた手つきでキーボードに指を這わせた。

アーガイル： そいじゃ、もう遅いし落ちるね。明日には、レベル上がりそうだよ！また夜からクラハン（仲間集団で行うモンスター狩り）よろしく

ももプー： あいあい。ガイさんもお疲れ。明日盟主（リーダーの意）INしないかもって言ってたから、ガイさんPTリーダーよろ。あ、12時過ぎてるから明日じゃなくて今日かww

アーガイル： おやすみなさいー

ももプー： バイバイ♪

由梨姫： まったない

チャットを終えた和彦はゲームを終了させ、すぐ隣りにひきっぱなしになっている布団にそのまま潜り込む。

・・・明日は、もうワンクラス上のアイテムが買えそうだ。和彦の頭の中は、寝ても覚めても『オンラインゲーム』のこ

とでいっぱいだった。

目覚ましを9時にセットする。

今年25歳になる彼には仕事もなく、同居している親以外の人間関係もほとんどなかった。

明日以降の日々もすべて、彼にとっては朝起きてから夜眠るまでがゲームのためにあった。

和彦は学生時代、ひどいイジメを受けた。

気の弱い彼は、必然的に登校拒否、そしてひきこもり、とお決まりのコースをたどった。

一日中家にいて、することが何もない。かと言って、勉強する気など起こらない。

そこで手を出したのが、ネットゲーム。つまりMMORPG『多人数同時参加型オンラインRPG』と呼ばれるものだ。自分のキャラクターを好きな容貌に作り、職業（戦士か魔法使いか、弓使いかヒーラーか）を決める。

そして、広大なゲーム世界の中で、モンスターを倒したりしながら冒険をする。経験値を稼ぎ、レベルを上げて強くなっていく。強くなればゲーム内貨幣（モノを买える）が沢山稼げ、強いモンスターを相手にできるようになるとレアで強力なアイテムをゲットできるようにもなる。

和彦は、これにハマった。

ゲーム内では、誰も生身の和彦を見るわけでない。白銀の鎧に身を固めた勇敢な騎士（ナイト）、アーガイルとしか認識していない。ゲームで知り合う者はみな親切であった。イジメにあった生身のクラスメイトたちに比べれば、そのありがたみにおいて天地の差があった。

しかも、社会と関わりをもって生きている人々に比べ、彼には食事と風呂、一定の休憩以外の全ての時間をゲームに注ぎ込むことが

できた。必然的に彼のキャラは強くなり、仕事を持ちながら空いた時間でやりくりしてゲームをやっている者たちを、遥かに追い抜いた。そして彼の持つ強力な魔法アイテムは、周囲からの賞賛の的となった。

現実世界ではバカにされ、さげすまれている彼もこの世界では、他者から羨ましがられ、大事にされる「ヒーロー」だったのだ。和彦の両親は、仕事もせずゲームしかない彼を責めなかった。いじめられて、社会不適應になってしまった我が子不憫さに、小言も言わず毎日三食の食事を与え、月々のネット接続料やゲームプレイ代金を支払った。

もはや、この世界で生きる以外に考えられなかった。

「それじゃ、仲良くやってくれ。父さんはこれから祈祷会だから」牧師である水穂の父は、そう言う二人を残して部屋から去っていった。

もはや勉強机に向かって宿題の続きをすることなど忘れて、目の前の女の子を見つめた。

謎の少女は、おもむろに口を開いた。

「なんだ。私の顔に何かついてるのか」

さつきいきなり水穂の部屋に入ってきた父は、この少女を紹介してきた。

「こちらは、月葉（つきは）ちゃん。知り合いから預かってね、しばらくウチで面倒をみることにした」

・・・説明、それだけかい！

水穂の父は、日本でも顔の広い教会の牧師であったから、こういうことは度々あった。面倒見が良すぎる彼は、困った人の面倒を率

先してみた。妻も信者であり、もともと覚悟もあつたのか眉一つ動かさずに夫に従った。

ただ、子どもである水穂は、生まれた時からキリスト教の教育は受けてきており厳密には信者であつたのだが・・・、学校ではキリスト教を信じてるなんて友達はなかない。「自分はみんなと違う」という気後れ。そして遊びたい盛りなのに日曜日は礼拝、行事があればその手伝いをさせられ「なんでフツーの子と同じように好きに自由時間を使えないのよ!」という反発。水穂は自分が「牧師の娘に生まれた」ということをあまり喜べなかった。そして今もまた、いきなりどこから来たのか得體も知れない子の面倒を押し付けられた!。

これじゃ、好きに遊びにいけないじゃん!

・・・でも、よく見るときれいな子。

目の前に立つ少女は色が白く、長い黒髪を腰まで垂らしていた。意思の強そうな、切れ長の目。

青いチェックのスカート。紺のブレザーの胸元からは、赤い蝶ネクタイがのぞいている。多分、どっかの高校の制服だ。だったら、年は私と同じだな。

「えつと・・・月葉ちゃん、だよな? 苗字教えてくれるかな?」
目の前の子は、じつと黙って立っている。とりあえず、話題作らなきゃね。

「ない」

答えが思いがけなかったものだったので、水穂は固まった。ない・・・ってそんなアホな!

顔をこわばらせて、水穂は気を取り直して別のことを聞いた。

「出身はどこ? やっぱり東京?」

さすがに、出身地がないなんてこと、ないだろ・・・

「ヴァチカン」

水穂は天井を仰いだ。オーマイガー! 話がかみ合わん・・・。

だいたいさあ、ヴァチカンって人が住むところじゃないじゃん。単にカトリック教会の総本山があるだけでしょ？

それにアンタどう見たって日本人よつ。しかもカトリックって何？　ウチはプロテスタントなのよ！お父さんたら何考えてるのかしら！。

水穂の父は優しいことと善を行うことでは右に出る者はないほどであつたが、することがどこか一本抜けているところがあつた。

「でさあ・・・」

水穂は、さつきから一番気になっていることを、いよいよ聞く決心をした。

「その・・・ナニ、月葉ちゃんが腰から下げてるモノって・・・、刀？」

月葉は可憐な制服姿に不釣合いな腰の日本刀に手を触れた。

「そうだ」

あつさりとした答えだつた。もう・・・そんなことは分かつてるのよつ！　なんでそんなモノ腰から下げてるのかが知りたいのよつ！

「それさあ・・・、何に使うの？」

苦笑いを浮かべた月葉は、急に水穂に顔を近づけてきて、真顔で言つた。

「知らないほうがいい」

和彦は追い込まれた。

確かに、彼は強かつた。誰もがうらやむアイテムを持ち、レベルも到達し得る最高に近かつた。

しかし、ゲームとはいっても、大勢の人間が集まって作る世界である以上、社会性の乏しさは彼に様々な問題を引き起こした。

トレードや狩場での揉め事、妬みからの悪口やクラン（プレイ

ヤー集団） 同士のケンカ。コミュニティ掲示板では、彼のキャラ名が名指しで批判され、書き込みの応酬は掲示板を炎上させた。

ゲーム内での友人達は、悪い意味で有名になってしまった和彦を、腫れ物に触るように敬遠しだした。

もはや、彼の居場所もなくなった。どんなに強くても、他人から相手にされなくなつては『裸の王様』に過ぎない。

しかし、彼から今更ゲームを取ってしまったら、何も残らない。どうしようもなくなった彼は、新規に新しいキャラクターを作り、いちから育てなおすことにした。

今度は、女性キャラを作つて、自分も女性としてふるまつてやる。いわゆる『ネカマ』である。

そう腹をくくつてしまうと、和彦は少し機嫌を取り戻した。

そして、『自分を演じる』ということに少なからぬ興奮を抱いた和彦は、アーガイルの所持品とお金をすべて新規キャラに移し、レベル1から育成を始めた。すでに大きなアドバンテージを持つていたそのキャラは、三週間たたないうちにレベル50になった。

和彦に、再び優越感に浸れる日々が戻った。もう、誰も僕が元アーガイルだったことを知らない。ヘタうたなきや、またずっと英雄でいられるー。

リビングにコーヒーを取りに行った時に、両親がフィギュアスケートを熱心に見ていた。その時画面の中で踊っていた選手に好感をもった彼は、浅田真央選手の名前から一部とつて新規キャラを『魔央』と付け、魔法使いとして育てた。

・・・なんか、ヤダ。

月葉が後ろからついて歩いてくる。

CDショップに行くんだと言うと、それなら私も、と言うから一緒に家を出てきた。

水穂は、自分たちが街行く人から注目的になっていることが、痛いほど分かっていった。一方、月葉は平然とした表情で、機械のようにな正確な歩調でついてくる。水穂は、ニュースで見た北朝鮮の軍隊の、一系乱れぬ歩調の行進を思い出した。

月葉が目の覚めるような美人、だということもあるかもしれない。しかし・・・何と言っても一番の原因は、どう考えても腰の刀だ。さつき、不思議なことがあった。

警察官が、顔をしかめて職務質問をしてきたのだ。・・・ま、当たり前かあ。

月葉は顔色一つ変えず、不思議なことを言った。

「警視總監以上に伝える。国家ナンバー12・個人番号AKD2003を検索してみよ、と。レベル3の国家機密だから、アクセスには外務省の許可がいるぞ」

・・・あんだ、スケバン刑事か何か？？

応対した警官は、初め大笑いしていたが、無線で連絡をとっている最中に顔色が変わった。

「こ、これは失礼いたしましたあ！！」

解放はされたが、一番事態が理解できない水穂は、もだえて悔しかった。

・・・いったい何なのよお、この子は！

考え事で前方不注意になっていた水穂は、母親に手を引かれている女兒とぶつかった。

女の子の手から、ガスで宙に浮いていた風船の紐が離れた。

主人の管理下を抜け出した風船は、揺れて高く浮き上がっていく。「ご、ごめんなさいっ！」

大慌てで謝った水穂は、信じられないものを見た。

何を思ったのか、低くかがんだ葉月は、そのまま飛び上がった。

その跳躍力は、人間のものとは思えなかった。

月葉は、およそ30mを跳躍して、風船をつかんだ。

下世話なことを言えば・・・下着が丸見えであったが、あまりのことに街の人々はそんなところを気にするどころではなかった。

その時、横のビルの四階で仕事をしていた社員の一部は、窓から見えた光景に、夢ではないかと目をこすった。中には、ここが何階か確かめるために、窓の下を覗き込む者まで現れた。

重力なんて『そんなの関係ねえ!』と踊るかのようになり、軽やかに着地した。

「ハイ。お嬢ちゃん、ゴメンね」

優しく、風船を手渡す。

・・・この子、こんな表情できるんだ。

それは、水穂でさえ引き込まれる、慈愛に満ちた笑顔だった。

和彦は、精神に異常をきたしてきた。

ひきこもりのゲーム生活のため、恋人どころか出会い自体が望めない環境の中で、主にAVで若い男性にはどうしようもない性欲を処理していた。

しかし、朝から晩まで、和彦としてでなく『魔央』として振舞う時間のほうが圧倒的に長くなりだした。

どっちが本当の自分か、分からなくなる錯覚に陥った。

そして、ゲームだからこそ実現できるプロポーシユン抜群の美人キャラは、いつしか和彦の理想の女性像となっていた。思い通りにならない生身の女性よりも、自分を裏切らない二次元のこの美女のほうが安心だ。いつしか、彼はAVにも実写の女性のグラビアにも興味を示さなくなった。

和彦は、自分の全てをモニターの中の電子の情報、『魔央』に投影していった。

・・・僕は、魔央ちゃんになってしまいたい。もう、この世はいやだー。

モニターから、幾筋もの光が差し、部屋を包んだ。

画面から手が、足がー。そしてついに全身が現れ、一つ背伸びをしたそれは、和彦に笑いかけた。

「ソレジャア、ヒトツニナリマシヨウ」

実体を持った魔央は和彦にの背中に手を回し、唇を重ねた。

「動いた」

突然、そう言っで月葉は立ち止まった。

「動いたって・・・何が？」

その質問には答えず、月葉は来た道を逆走しだした。

「ちょ、ちよつと待つてよう！」

水穂は月葉を追いかけたが、追い付けっこないことを悟り、走る速度をゆるめた。

だつて、車追い抜いてるんだもん。

「ここか」

閑静な住宅地のある一軒の前に立ちはだかった。

玄関があつたが、彼女にそんなものは用がなかった。

月葉は、助走もなく飛び上がると、二階の窓を突き破つて中の部屋に着地した。

砕け散つたガラスをパキパキ踏みしめながら、異形の女性に近づいた。

「サキユバスか」

腰の日本刀を抜刀する構えを見せ、月葉は魔法使いのゲームキャラを見上げた。

「あら、意外に早かったのねえ」

スピーカーを通したようなくぐもった声が聞こえる。

「でも・・・もう遅いわ。この男の子が、私に命を吹き込んでくれたんだから」

美形の顔が、グニヤリとゆがみ、気味の悪い笑みを見せた。

「・・・プロミネンス」

サキュバス、と呼ばれたその異界の生物は、変化した。もはや、あのかわいいゲームキャラ『魔央』ではなくなった。バカでかい耳のような羽根。手足は鳥、顔と体は裸体の女性のようなであった。目の前に、燃えたぎる火の玉が現れた。それは、まるでミニチュア版の太陽のようであった。

「まずい」

月葉はとっさの判断で、そばで倒れていた和彦を抱えて、割れた窓に向かって思いつきり跳躍した。

宙を舞った月葉のすぐ後ろで、轟音が轟いた。

「エヴォケーション（力術）か・・・」

和彦の家を含む半径200mが、爆風に吞まれた。

もう、水穂は何を見ても驚かないわよ！ という気でいたが、やっぱりたまげた。

遠くから、住宅地の屋根を蹴って、忍者のようにピョンピョン跳躍してくる月葉が見えた。しかも、誰かを抱えている。

水穂の目の前に軽やかに着地した月葉は、息一つ乱していない。

「この人を頼む」

・・・た、頼むったって・・・。

「ヤツの狙いは私だけ。もし、この人の意識が戻ったら、教えて」それだけ言って、月葉は走り去ろうとした。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ 教えるって・・・いったいどうや

って？」

この常人ばなれした行動範囲の広すぎる人に、どうやって追いついて伝えろと？

「祈れ。そうすれば分かる」

はあ。

謎のような言葉を残して、月葉は瞬く間に道の向こうに見えなくなっていた。

サキュバスは、低空飛行で地上を走る月葉に迫った。電柱や電線をよけるのに苦戦していたが、その影は着実に月葉に迫っていた。・・・歩道は人が多い。車道は車だらけー。

涼しい顔で地面を蹴った月葉は、歩道と車道をへだてる細いガードの上を、落ちもしないで駆けた。

「チェイン・ライトニング」

サキュバスの触覚から、まばゆい電流が放出された。

車道を走る車の一台が、爆音と共に炎上した。

その電流はそこで止まることなく、水面を跳ねる小石のように次々と車を襲っていった。

そして、その矛先は、間違いなく月葉に狙いを定めていた。

月葉は、恐ろしいスピードで街を疾走しながら、腰の刀の柄に手をかけた。

「・・・セイント・ソード」

それは一瞬の出来事だった。

素早く抜き放たれた、白金の刃の切っ先は見事な弧を描き、太陽の光を反射した。

前傾姿勢のまま高く飛び上がった月葉は、半身をひねって空中で回転。

横真一文字に薙ぎ払った刀の放った『気』の塊は、瞬時にし

て矢のようにサキュバスに向かっていった。

「チッ」

間一髪にしてよけたサキュバスだったが、気がそれたお陰で電撃攻撃が消えた。

「いやあああああああああああ」

周囲の人が震え上がるほどの声を上げながら、月葉は赦せない悪魔の力を打ち砕くべく突進した。

北辰一刀流奥義・烈火斬翔剣！

月葉はビルの壁を蹴り、斜めに飛び上がって渾身の一撃を打ち込んだ。

「あ、やっと気がついたあ」

和彦が目を覚ました時、視界に飛び込んできたのは・・・、ちょっと可愛いメガネっ娘の女子高生だった。

どうして自分がこんなところにいて、なんでこの子と一緒にいるのか！。全てが理解の範疇を超えていた。

「き、きみは・・・？」

聞かれた水穂は肩をすくめた。

「何がどうなってんのか、聞きたいのは私のほうよっ。とにかく、あなた何か得体の知れないモノに襲われそうになってみたいだよ。まあ・・・得体が知れないっていう点では、私の連れも負けてないけど」

そう言うってから、水穂は思い出した。そう言えば、この人の意識戻ったら教えるって言われたような。

・・・どうやって？ 祈れ、って何をどうするのよう！

あの子に関することならもう何でもありだ、と開き直った水穂は、目を閉じた。心の中で、念じてみた。

「・・・月葉さん。聞こえる？」

「ああ。何だ？」

おおつ、心で会話ができる！

「あなたが連れてきた男の人、意識が戻ったよ」

「じゃ、説得してくれ」

・・・へ？

「今闘っている悪魔は、力技では死なん。その男が、心から自分の力で生きようと思わない限り、勝てる可能性は低い」

「なるほど。虜にした人間の魂から力を吸収して、武器にしてるわけね」

「さすがは牧師の娘だな」

言われた水穂は良かったのか悪かったのか複雑な心境になった。

「それでは、よろしく頼む。とにかく今、私は手が離せない」

遠方で、大きな火柱が上がった。それと共に、人々の悲鳴が聞こえる。

・・・確かに、忙しそうだ。

「そうか。今、そんなことになっていたのか」

和彦はしゃがみ込んで、道端に座りこんだ。

「僕って、ほんと最後までどうしようもないやつだよ。社会の役にも立たないし、こうして迷惑までかけるし。僕なんて生まれてこなきゃ良かったんだ」

・・・迷惑、ってレベル、超えてるんだけどー。火の手が上がり、炎が街を紅に染めるのを遠目にみながらちよつとそうは思ったが、水穂にはやはり牧師の血が流れていた。

彼女は、父が連れてきた、沢山の人と交流してきた。虐待にあつた子や登校拒否児童はもちろんDVに悩む主婦、アル中、ホームレス、リストカットをやめられない女子高生ー。

みな本当は心根の優しい、普通の人なのだ。ただ、ちよつとばか

り生きることには不器用だっただけ。世の中全体が彼らに歩み寄る努力を怠けただけー。

水穂は、さつき初めて会ったばかりの和彦を、男女の感情とは超越した所で愛しく思った。

「あきらめないで」

和彦の横にしゃがみ込み、水穂は彼の手を握った。

「今までのあなたはもう忘れて。過ぎてしまった取り返しのつかないことを考えるより、あなたの未来を考えましょうよ。頑張れば、きっとあなたの居場所が作れるわ」

「そうかなあ」

一瞬は表情が明るくなったものの、再び懐疑的になった彼はこぼした。

「やっぱり、ダメなものはダメなんじゃ・・・僕は一生不幸な運命にあるんだよ、きっと」

和彦は、知らないで水穂の地雷を踏んでしまった。

水穂は過去に、説得する彼女の目の前で、同じことを言って飛び降り自殺をされてしまったことがあった。

「ばかっ」

水穂は、恥も外聞もなく泣きわめきながら、和彦の背中をボカボカ叩いた。

「なんでそんなこと自分で決めつけるのよう！ あんたそんなに世界のことが分かってるの？ 真理が分かってるの？ なんも知らないくせにいい、軽々しく自分を粗末にしてるんじゃないわよう！」

過去の悔しさが、そして目の前の一人の命も十分に救ってやれない自分の力のなさ、水穂の目から狂った水道の蛇口のように涙を流したらせる。

水穂に背中からしがみつかれ、服越しにジワツと広がる涙の温かさを感じながら、和彦は思った。

・・・ゲームでは、僕が強いから、お金やアイテムを沢山もっていたから、チャホヤしてくれた。

親も、僕が血を分けた子どもだから、こんな情けない息子でも養ってくれる。

でも、この人は、さつき会ったばかりの見ず知らずの他人。なのに、こんなに泣いて、心配してくれている。何も得することなんかないのに。

無条件の愛情って、世の中にもあるんだなあ！。

水穂に感謝した和彦の心から、『魔央』の占めるスペースが急速に縮まっていった。

「ハイドロ・ブラスト」

サキュバスは空中に静止したまま、低い声でつぶやく。
来る！。

月葉は刀を一旦鞘に戻し、すかさず横転した。

周囲数十箇所のマンホールのフタがシャパンの栓のように飛び上がり、勢いよく水の柱が地上数十メートルの高さまで噴き出した。その水流は生き物のように曲がり、月葉めがけて襲い掛かってきた。

十分に引きつけてから、コンマ数秒の差で上空に逃げた月葉は、サキュバスに生じた一瞬のスキを見逃さなかった。

「超力招来・金剛雷電雲」

上空に黒雲がひしめき、まるで夜のように周囲は闇で満ちた。

一閃の稲妻が、天空の真上からひらめき下ってきた。

月葉の髪は波打つように逆立ち、スカートは風に激しくはためいた。

「柳生風神流・月下崩牙旋破剣」

月葉を取り囲む、目を射るほどのまばゆい光の球体が現れた。宙を蹴り、柄に手をかけたまま全身の神経を利き腕に集中させる。月葉は光の塊となつて、サキユバスに突っ込んだ。ミサイルのよう、光が背後にその軌跡を残像として残しながら―。

驚愕の表情を浮かべ、月葉を見るサキユバス。

怒りに満ちた月葉の視線は、悪魔のかしらを貫き通した。

居合い斬りの要領で、月葉はすれ違いざまに刃身を鞘に滑らせ、時速にして600キロの速さで横一文字に薙ぎ払った。

「破魔！」

弾け飛んだ肉片が、放射状に地上へと落ちていった。

「法皇。あの子を日本へ送り込んだというのは、本当ですか」

ローマ教皇庁の建物の一室。教区長の司祭、マッテオは言った。

後ろに手を組み、窓から市内の夜景を見ていた法皇、パウロ・ヨハネ四世は振り返らずに答えた。

「その通りだ。預言にある七つの悪魔どもは、もうすでに動き出しておる」

「なんと・・・すると先日日本からの情報は、まことだったのですか」

「サキユバス。悪魔リヴァイアサン直属の使い魔」

暗記していた単語を思い出すかのよう、言葉が続ける。

「イエス・キリストの十字架から2000年。主の来臨の前に、サタンが最後の攻撃に出てくる。あの子は、それに立ち向かうために主から選ばれた器なのじゃ」

「なるほど。それで 預言にある『日の出づる国』―すなわち日本がまず狙われたわけですね」

「・・・あの子の戦いは始まったばかりじゃ。過去の剣聖たちの魂を取り込んだとはいえ、悪魔の勢力も手ごわい。相当な試練を強いられるだろう。我々は、ただあの子の勝利を祈るしかないのじゃ」
そう言っ たきり、法皇はこうべを垂れて、長い時間祈りを捧げた。

ミスの禁煙席で向かい合った月葉と水穂は、ドーナツをほおばっていた。

「ありがとう」

突然そう言われてもなんのことか腑に落ちなかった水穂は、かけのフレンチクルーラーを皿に置いて、「へ？ 何のこと？」と聞き返した。

「あの男の人、説得してくれたじゃないか」

ああ、あのことが。別に大したことじゃないよ、と言って、水穂はカフェオレをすすする。

「・・・アンタと私は、最高のコンビになりそうだ」

水穂は飲んでいたカフェオレをふき出しそうになった。

「ブツ。もうイヤよ！ あんな怖い目にあうの・・・」

首をブンブン振ってイヤイヤをした。

「あきらめなよ。あんたも多分、『主に選ばれた器』だから
なんじゃそれ。牧師の娘だけど、どちらかというと信者としては劣等生のこの私が？」

「でもさあ」

首を傾げて水穂はつぶやく。

「あんなに強くて不思議な力も持つてるんだから・・・。月葉が単独でも勝てるんじゃないの？」

それを聞いた月葉は、顔を伏せてちよつと寂しそうに笑った。

「そうはいかないんだ。悪魔に勝利するためには・・・、私じゃなくみんなの『ココロ』が悪魔に勝たなきゃいけないんだ。そして、その手助けに打ってつけなのが、アンタ」
・・・やれやれ。やっかいなことに巻き込まれたなー。

二人の戦いは、始まったばかりなのだ。

参考作品：「リネージュ2」（オンラインゲーム）
「ダンジョンズ・アンド・ドラゴンズ」（オンラインゲーム）

第二話 カーナビ・ララバイ

何度やっても、結果は同じであった。

愛車の青いSUBARU・インプレッサのシートに身を沈めていた信彦は、首を傾げた。

午後5時半。会社帰りの彼は、余り行きつけない店で友人と食事を取る約束をした。念のため、と思いあるだけで日ごろ使用しないカーナビに電源をいれ、案内を見ることにしたのだ。

新車として購入した際、カープラザの担当者がサービスで付けてくれたのだ。別にムリにはいらないうや、と思っていたのだが、「無料ですから」と言うので、付けるがままにしておいた。人間、『タダ』という言葉には弱いものである。

・・・どうもおかしい。

目的地に行くには、どう考えても2号線で行くのは遠回りのはずだ。オレでも、ここからならK市駅方面に真っ直ぐ行くほうが近いなんてことくらい分かる。

それでも、さっきからカーナビは2号線ルートをしつこく表示してくる。

ちゃんと、『最短ルート』を表示するようには操作してるのに・・・故障してるんかいな？

そんなはずはない。この車自体が、購入してから4ヶ月経ってないピカピカの新车だ。いじってもないのに、4ヶ月そらで壊れるイケてないカーナビが、果たしてあるか？ メイド・イン・ジャパンの名が泣くぞ？

結構意地っ張りで執念深い信彦は、これでもか、と同じ操作を続けた。

「いいかげんにしてください」

うんざりしたような女性の声。

「うるさい。オレはどーしても納得いかねえんだよ！・・・つて誰？」

思わず返事をしたものの、この車には信彦一人しかいないはず。

「さっさと出ないと、待ち合わせに遅れると思うんですけど」

！！？？

分かった。しゃべってるのはあまり認めたくはないが・・・カーナビの音声だ。

声質のいい女性の、いかにもというアナウンスの声。でも・・・こりや機械だ。フツー、プログラムされたことしかしゃべらないはずだよな？　なんで、こんなおせっかいを焼くようなことを言う？

「あのね、なんできちつとした最短ルートを表示しないの。あんた、カーナビのクセしておかしいんじゃない？　これは命令。きちつとしたルート案内をしなさいっ」

冷静に考えれば物凄く非現実的な光景なのだが、怒りのほうが勝っていた信彦は、カーナビ相手にまっこうから議論を挑んだ。

「イヤです」

・・・あら。

そう言われてしまえば、返す言葉がない。

「分かったよ。もうお前の世話にはならねえよ。じゃあな」

信彦は、カーナビの電源を落とそうとした。

「ああっ、お願い！　信彦さん、お願いだから待ってくださいっ」

まるで年貢の取立てに來た役人に泣きつく百姓のように、あわれを誘う声で訴えてきた。

・・・。

「そうだ。賭けをしましょう。私が勝てばこのルート。あなたが勝てばあなたに従います。どう？」

ああ。オレはとうとう、カーナビと賭けをするハメになったよー。

「目の前の道の、二つ向こうの電柱を見てください。今は誰もい

ませんが、次にそこを通るのが男か女か。ただし歩行者のみ。車・バイク・自転車とかに乗った人は対象外ということだ」

「ああ、もう何でもいいよ」

「では、私から選ばせていただいてよろしいですか？」

数秒間、音声が途切れた。・・・なんだ、考えタイムなのか？

「女」 カーナビは、勝負をかけてきた。

「ヘイヘイ。それじゃオレは男でいいよ」

それからしばらく、信彦はシートを倒してもたれ、来るべき通行人を待ち構えることにした。

数分して、だいぶ向こうの曲がり角から、サラリーマン風の男が歩いてくるのが見えた。ゴールである電柱にはまだ距離があるが、このまま行けばオレの勝ちだ。例えば今誰かが曲がつてきても・・・全力疾走でもしない限り、あの男を追い抜くことはあり得ない。勝ちを確信した信彦は、この世のものとは思えないものを見た。それが網膜に映っていたのは一秒にも満たなかったから、細かい描写はできないのだが！。

なんだか、学生服を着た女の子が、F1レース並みのスピードで横を通過していった。

もしこれが夢でないのなら、彼女は走っていた。

「私の勝ちですね」

カーナビは誇らしげに言う。画面を見ると、『再現VTR』とテロップが流れ、スロー再生で先ほどの女の子の疾走シーンを流していた。分かった、分かったから！・・・って、どこかにテレビカメラでもついているのか？

頭を抱えた信彦がフロントガラスの外を見ると、サラリーマン風の男はまだ電柱にさえ到達することなく、チンタラと歩いていた。

「ななな、なんで私を置いていくのよう！」

都立A女学院高校の校門でゼイゼイ言いながら、水穂は顔色一つ変えずに腕組みをして待っていた月葉に言った。

「だって、アンタが遅刻しそうだ、って言ったじゃないか」

「そりゃ、そうは言ったけど！ 一人で先走ることないでしょ。例えばあ、私を背中におぶって走るとかあ、なんか手はあったでしょ？ 私は追いつけないんだから」

前回の事件で、月葉が走れば自動車よりも速いことは分かっていた。本気で走ればどれくらいのスピードが出るのか興味があつたが、そんなくだらない質問をしにくい雰囲気は月葉にはあつたので、未だに聞けていない。

「済まなかった。次からは気をつける」

月葉は、水穂と同じクラスに転入となった。

この前はしばらく預かるだけの話だったのに、無期限滞在で、しかも学校まで通う、って……。話がちがわい！

今の月葉はこの学園の制服、紺のセーラー服姿になっていた。

襟に赤の三本ライン・同じく赤のスカーフ。

月葉は「前着てたやつのほうがよかった」などとブツブツぬかすので、

「バカア！ 決まってるから『制服』って言うのよっ。好きなモン着ていいんだったら制服じゃないわよっ」

顔をしかめて、しばらく何か考えるような表情をしていた月葉だったが、

「分かったよ。我慢すればいいんだろ。世の中って面倒くさいなハア。本当にこの子の相手は疲れる……」

自己紹介の時も、教室での授業の時も、やはり腰の刀は離さなかった。先生方も、そのことに関しては月葉に注意をしなかった。きっと、裏で権力機関の手が回って、特例として認められたのだろう。

体育の授業。

体操服に着替えた。・・・が。

月葉は、この服では腰に刀を差せないとみて、たすきのような紐で背中に固定している。よくテレビで見る『忍者』のような刀の差し方だ。

まず、はじめにドッジボールをやったが、月葉は見学した。

彼女いわく、「私が参加したら、人が死ぬよ」

・・・確かに。アンタはでないほうがいい。

そのあと、100m走のタイム測定、走り幅跳び。

水穂は体育の教師から説明を聞きながら、イヤな予感がした。

月葉のタイムは、測定不能だった。スタートの合図をした瞬間にゴール地点にいるものだから、ストップウォッチを操作する者に月葉の姿が視認できないのだ。

走り幅跳び。助走をつけて砂場の前で踏み切った月葉は、校庭のフェンスを飛び越え、空の彼方へ見えなくなった。

「おい、南条。（水穂の苗字）あの子、ちゃんと帰ってくるかな？」

「・・・多分」

そう言いながら、あまり自信はなかった。

カーナビとの賭けに負けた信彦は、潔く遠回りして運転していた。

「この先、梶尾交差点を、左方向です」

さつきから、あまり余計なこととは言ってこなくなった。普通のカーナビに戻っているカンジだ。

・・・今からでも、道逸れてやったらどうなるだろ。

「今、余計なこと考えましたね」

ものすごいとがめるような声で、カーナビがすごんできた。

普通、カーナビって、それほど抑揚のないしゃべり方じゃなかった？ これ、明らかに怒ってるよ。

「ブツ。お見通しかよ。ハイハイ、ようござんす。アンタの言う通りにいたしますよホイ」

「・・・素直じゃないですね。そんなんだから彼女の一人もできないんですよ」

力、カーナビごときに言われたかないやい！

「あ、左手に可愛い女子高生の集団」

ヘンなことを案内するカーナビもあったものである。

反射的に信彦は、前方の車との車間距離をちゃんと確かめてから、目視で女子高生達の短めのスカートを拝んだ。追い抜いてからも、バックミラーで捕らえて眺め続ける。植草ミラーマン教授顔負けの盗み見である。

おっ、左から二番目の子がカワイイ。

「・・・エッチ」

アキれたような声を出して、カーナビが非難した。

「お、おいつ。そもそも教えたのはアンタじゃないかつ」

驚いた事に、スピーカーからシクシク泣く声が聞こえてくる。

「の、信彦さんは・・・、あ、ああいうのが好みだったのね・・・

ヒック・エグツエグツ」

・・・泣くカーナビって、あるのか？

そしたら、急にコギヤル風の若い娘の声に変わった。

「じゃあ、これだったらいいのお？ んじゃ、今から案内はこの

アタシに変わりまっす！ ヨロピク」

「あのなあ、そういう問題じゃないだろ・・・」

その時、ラジオニュースが、驚くべき内容を伝えてきた。

「臨時ニュースです。午後6時5分頃。K市駅近くの交差点で、大型トラックの積荷がほどけ、工業用の金属パイプ50本が道路に落下。15台の車を巻き込む玉突き事故が発生した模様です。なお、

現在分かっているだけで死者2名・重傷者8名・軽傷者13名……

「そうか。オレがもし最短ルートを通っていたら、確実にその時間あそこを通っていたはず！」

「どお？　ちよつとは私のこと見直した？」

その時だった。

車体が、ガクンと前のめりに傾いた。

何かの衝撃が、後ろから車全体を突き上げてくる。

ちらつと後方を見ると、道路が炎上していた。原因は何か、ここからではさっぱり分からない。

「おいっ！　何が起こったのか……分かるか？」

もはや、この状況で信彦が頼れるのは、カーナビだけだった。

「わ、私にも良く分からない……あれは多分ビジター（来訪者）
。この世界の者ではないことは確か。とにかく、全速力で走って！
違反でつかまって、死んじゃうよりマシでしょ？」

交通違反を奨励するカーナビもたいがいだが、この状況では言う
とおりにしたほうがよさそうだ。

信彦は、アクセルを踏みつけ、何台もの車をごぼう抜きにした。

不思議な事に、その『危害を加えようとしている何か』は、
他の車には目もくれず、なぜか信彦の車だけを執拗に狙ってくるの
だった。

「来る」

ほつきで教室の床を掃いていた月葉は、つぶやいた。

……またですかい。

水穂が何か言おうとする前に、月葉はほつきを放り出して歩き出
していた。

「ちょちょ、ちょっと！　そうじ当番放り出してどうするのよう！」

でも、恐らくそんな瑣末なことよりもタイヘンなことが起こるの
だろうと踏んだ水穂は、あきらめて付いていった。

途中、担任とすれ違ったが、水穂はあわてて取り繕う。

「き、緊急出動ですつ。・・・ハイ」

教師は目を丸くしていたが、二人を追ってくることはなかった。

もう、外はすっかり夕暮れ時であった。

「あれに乗って」

校舎を出るなり、月葉は駐輪場にあった一台の自転車を指差す。

「え」

月葉是水穂の内心の戸惑いを見抜いて、フツと笑った。

「そりや、私一人なら走ったほうが速いけど、あんたもいてもら
わないと困るから、これ二人乗りして行くの」

それを聞いた水穂はガツクリ肩を落とした。やっぱり、私もいる
んかい！

しぶしぶ、荷台にまたがる水穂。チャリンコのハンドルを握りし
め、キツと上を向く月葉。

「いくよっ」

言うのが早いのか、ただのママチャリはガクン、と大きな弾みをつけ
猛スピードで爆走しだした

・・・あのさあ、ジェットコースターだって、初めはカタカタゆ
つくりのぼっていくつてのに。加減してよね！

そんなことを考えながら、水穂は下を見た。

下に見える黒い粒って・・・人の頭？

「キャ~~~~~~~~」

水穂の絶叫が、ビルの谷間にこだまする。

キムタクが自転車で疾走するCMだって、こんなに過激じゃない

わようー。

「・・・追われているのは、霊だ」

自転車の荷台で生きた心地もしていない水穂の気も知らないで、月葉は状況説明を始めた。

「悪魔ベルフェゴールの使い魔、ブラックベアード。球体で、直径50mの目玉の怪物。ヤツは、天国にも地獄にも行けないで浮遊している霊を好んで、食べる」

ものすごい風圧で、水穂はなかなか目を開けられない。

「そ、その霊を助けるのお？」

「そうだ。人を救うのは、アンタ好きだろう？」

確かにそうだけど・・・。今回くらいは遠慮したいかな？ なんて思ったが、月葉を怒らせるとそちらのほう怖いような気がして、黙っておいた。

「50m先右折つ。そっちのほうがすいてるよ！」

「よしっ」

アクセルを踏む足を緩めずに、信彦は思いっきりハンドルを切った。

耳障りなタイヤの摩擦音のあと、恐ろしいまでの遠心力で、信彦は助手席の方につんのめった。

何とか曲がりきった瞬間。ルームミラーごしに、追跡者の姿を見た。

宙に浮く、眼球の怪物。

そいつがまばたきする度に、フラッシュがたかれたように光が放たれる。その直後に、周囲に爆音が轟く。

・・・恐らく、ビームカレーザーのようなものでも出してるんだろー。

「助けが・・・来ます」

信彦は我が耳を疑った。

「このまま、何があっても全速力で真っ直ぐ走り続けてください。そうすれば・・・合流できます」

何が何だかわけが分からなかったが、少なくとも希望のある状況にはなったらしい。

「助けて・・・誰よ」

「あなたがさっき見た、恐ろしく足の速い女の子」

水穂は、ヘンな護符を持たされて、K市の大通りのド真ん中に立っていた。

さつき、月葉に自転車から降ろされて、「あんたはここで待機してな」と言われて、それっきり。

オイ。情報それだけかよ！

ま・・・時が来れば、これに何の意味があるのか教えてくれるだろう。

水穂は開き直って、月葉から何かテレパシーで伝えてくるまでは休憩しておくことにして、歩道の植え込みに腰掛けた。

40階建てのビルの屋上に立った月葉は、はるか向こうから激走してくる一台の乗用車を見た。

その後ろからは、気味悪い球体の異生物。

街灯やビルの明かりに照らされ、浮かび上がってグロテスクな外観を見せ付けていた。

「・・・動きづらい」

A女学院指定の制服は、スカート丈が長い。お嬢様学校なので、短くするのは校則違反になる。

「ま、いつか」

月葉はスカートを折って履き、ミニ仕様にした。

「これでよし」
何のためらいもなく、人が米粒ほどに見える下界へ舞い降りて行った。

グシャツ。

車の屋根で、何かイヤな音がした。

「助けの人です」

信彦の疑問を察したように、カーナビが伝えてきた。

こりゃヘコんだな。修理代いくらかつくかー。ちよつとそういつこ
とが頭をかすめたが、今は生きて帰ることが先決だよなあ。

「次、右」

カーナビは慌てて叫ぶ。

「・・・今から、車の上にいる方の指示どおりに案内します。あ
の方には、何かお考えがあるようです」

車の上に人が？ このスピードで、よく振り落とされないなー。
信彦は、ヘンなところで感心した。

「水穂。聞こえるか」

あら、もう休憩終わりか・・・短かったなあ。

ヨッコラシヨッ、と腰を上げてスカートの砂埃を払った。

「ホイホイ。感度良好」

「あと20分後くらいに合図する。そしたら、アンタに預けた護
符を、空中にかざすんだ」

水穂が手にした護符には、習った事のないような漢字がビッシリ
だった。

「これって・・・陰陽道に関係ある？」

何となく気になった水穂は聞いて見た。

「その通り」

「ブツ。勝手に術使ったら、安倍晴明に怒られちゃうわよ?」

水穂はノリで冗談を言っただけだったのだが、

「心配ない。晴明様に許可はとってある」

・・・あ、そう。

私にや、もうついていけん世界や。

散々ナビに振り回された信彦に、次第に疲れの色が見えてきた。

このスピードで、事故を起こさないだけでも主勲賞ものであるが、勝って帰らないことには意味がない。

信彦は車窓を開けて、上に屈んでいる月葉に叫んだ。

「おいっ、あとどれくらい走ればいい??」

月葉は、片膝をつき、セイント・シード聖剣を抜刀する構えをとって叫んだ。

「いよいよ最後だつ。向きを変えろつ。あの怪物に突っ込め」

エッ? そんな無茶な・・・

「死にたくなかったら、言うとおりにしろつ」 月葉は叫ぶ。

「お兄ちゃん! お願い、あの人を信じて。必ず私たちを救ってくれるよ」

今、なんて言った?

信彦は反射的に車体を反転させ、迫り来るブラック・ベアードに対峙した。

「今よつ、水穂!」

「はいな」

答えて護符を持つ手を高く掲げた水穂は、教わっていた呪言を唱えた。

「阿尊碑水翔華怨 稟化月法霸王詔命禅 陽賢密恕蕪箏音」

その時、人工衛星が不思議な映像を捉えた。

K市の夜景一帯に、光の帯らしきものによる巨大な図形が、浮かび上がっていたからだ。

六芒星、つまりヘキサグラム。ユダヤ教では『ダビデの星』とも言われる。

実は、月葉はただ闇雲に車を走らせていたのではない。

所々で、水晶の玉を落としていた。結べば、この図形になるように。

そして、その全ての点を結んだ中心には、水穂がいた。

地響きのような音を立てて、結界は発動した。

陰陽道の流れを汲むその法力は、見事に異形の怪物をその場に縛り付けた。

まばたきもかなわなくなったブラック・ベアードは、もはやこちらを攻撃できなくなった。

勝利を確信した月葉は、剣を抜き放ち上段に構えた。ストップモーションの映像のように、剣先の軌跡が残像となって残る。

「さあ。車ごとフルスピードであいつに突っ込んで！」

三人の魂は今一つとなり、魔物の懐へ飛び込んだ。

「月覇風靱剣・鉄指霧双斬り」

満月を背に、月葉のシルエットが跳んだ。

彼女が着地した時にはすでに、敵は縦一文字に真つ二つに切り裂かれていた。

一瞬で、魔物の体は細かく飛散し、後方もなく消滅した。

「・・・お兄ちゃん。正体明かすのあとになって、ゴメンね」

スバルのインプレッサを、信彦・月葉、水穂の三人が取り囲んでいた。

「遥（はるか）、だったのか」

五年前。中学三年という若さで亡くなった信彦の妹、遥。それがカーナビに宿った人格の正体だった。死因は、交通事故だった。

「私ね、受け入れられなかったんだ。もっとやりたいことがあったのに、恋だつてしたかった。いつか子どもだつて欲しかった。どうして、死ななきゃいけないの？ って」

車のボンネットに、信彦の涙が落ちた。

「でも、よかった。こうしてお兄ちゃんのこと守れたし。何だか悪いやつ倒すのにも協力できたみたいだし。これで思い残すことはないわ」

月葉は、抑揚はないが温かみのある声で遥に声をかけた。

「本当によくやったよ。天では、アンタのこの勝利は大きく覚えられた。安心して行きなさい・・・それじゃ水穂、彼女を送ってやってくれ」

呼ばれた水穂は、エヘンとひとつ咳払いをする。

「お兄さん。今から妹さんの魂を・・・、いわゆる『天国』に送ります。地上で会うことはもうないでしょうから、何か最後に一声かけてあげてください」

信彦は車体を撫でて顔を伏せた。

「遥。ほんの一時だったけど・・・、ありがとな。楽しかったよ」
水穂の朗々とした声が響く。

天にまします我が父よ

願わくば 御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ

御心の天に成ることく 地にも成さしめたまえ・・・

車体全体がまばゆく輝く。白い衣に身を包んだ遥が浮遊し、手を振っていた。

そして、空高く登り、その姿は次第に見えなくなった。残された三人は、いつまでも手を振り返していた。ついに、遥は夜空の星となった。

もちろん、二度とカーナビがしゃべることはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2293d/>

ディバイン・イヴ

2010年10月11日05時30分発行